隊員の声

みんなを守る消防士

■女性消防士として、温かみのある救助活動を

鈴木 怜奈さん（消防士）

消防士を目指したきっかけ

高校生まで運動部に所属していたため、その体力を仕事に生かしたいと思い、消防士を目指しました。

消防士になって

4月から9月の間は、消防学校で基礎知識を学び、10月から鹿角消防本部で勤務していますが、消防学校の環境から一変して、現場では『いつ何が起きるか』とそわそわしながら24時間を過ごしています。

ただ、先輩の方々を見ていると、日ごろから訓練を積んで体を鍛えていたり、車両の装備や設備を完璧に把握していたりと、いざという時への準備を万全にしている姿がかっこいいと思います。

鹿角で初の女性消防士として

鹿角で初の女性消防士ですが、女性の救助者の対応に加え、**女性らしい温かみのある救助活動ができるよう取り組んでいます**。今は、救助隊に入って救助活動の最前線を担いたいという目標がありますので、これからも日々の業務をこなしながら、より良い救助活動ができるよう努力していきます。

■要救助者に寄り添い、生命・身体・財産を守りたい

山﨑 雄平さん（消防副士長）

心掛けていること

救助活動では、迅速に救助することと合わせて、傷病者の苦痛をなるべく軽減できるように心がけています。事故にあった直後やがれきに挟まれているなど、救助者は大きな不安を感じています。こまめな声掛けを行うことで、少しでも不安を和らげられるようにしています。

消防活動では、財産が燃えている、ということを意識しています。また、家には、財産としてだけではなく、そこに住む方々の思い出が詰まっています。**少しでも多く、残してあげたい**。この一心で活動にあたっています。

皆さんの生命・身体・財産を守れるよう、日々の訓練や設備の点検などを万全にしています。

やりがいを感じる瞬間

感謝を求めているわけではないですけれども、救助して、その方の家族などから感謝の言葉をいただくことがあります。その時は、嬉しいといったらよくないかもしれませんが、消防をやってよかったと感じます。何もなくて出動しないのが一番なんですけど。

一人でも多くの方の安全と安心を守るため、日々訓練を重ね、一生懸命取り組んでいきたいです。

山﨑さんは、十和田湖での訓練を経て、鹿角で初の「潜水救助隊」としても活躍しています。

車両紹介

消防車両図鑑

ポンプ１号車

平成17年1月配備／
積載水量900ℓ
主に消火栓や用水路などから水を吸い上げて放水することができる。900ℓの水を常に積載しているため、水を確保できるまでの間も放水が可能。

車両によって装備が違い、さまざまな危機に対応できるようになっています！

ポンプ２号車

昭和62年12月配備
主に消火栓や用水路などから水を吸い上げて放水することができる。水を積載していない。消防本部で一番古い車両。

水槽付ポンプ車

平成4年12月配備／
積載水量2,000ℓ
水槽に2,000ℓの水を積載しているため、すぐに放水が可能。消防水利が不足する地域で威力を発揮する。

化学車

平成20年1月配備／
積載水量1,500ℓ、薬剤A 30ℓ、薬剤B 500ℓ
積載している水と薬剤を混ぜた泡状の化学消火剤を放射することができる。主に、建物火災や自動車火災などに出動する。

東日本大震災では、化学車と救助工作車が、被災地に出動しました！

指揮車

平成19年10月配備
現場活動を指揮する消防隊員が乗車する車両。人員輸送にも活用されている。

資機材搬送車

平成24年12月配備
東日本大震災の翌年から導入。大規模な災害などで活躍する。主に資機材を運搬する車両。車両事故や消火活動などの後方支援にも活用されている。

救助工作車

平成15年2月配備／
照明、クレーン、ウインチ、噴霧装置装備
交通事故などで出動する特殊車両。特殊な工具を積んでおり、挟まれている人や高所の人、下敷きになっている人などを救助する際に活躍する。

救急１号車

令和3年12月配備／
高規格仕様
傷病者がいる場合に出動する。車内では傷病者への救急処置ができる。患者監視装置や人工呼吸器、輸血ポンプなどさまざまな設備を搭載。また、傷病者からの飛沫を防ぐアイソレーター（密閉式カプセル）を搭載し、車内の救急隊員の安全を確保しながら救急搬送が可能。

緊急車両での消防・救助活動

消防車両は最大で５人が乗車可能。また、消防法の規定により、消防・救助活動の際には最低乗車人数は３人と定められいる。
通常の火災は、化学車とポンプ１号車が出動する。高速道路など水源を確保できない場所には、水槽付ポンプ車とポンプ１号車が出動するなど、状況に合わせた配車により、効率的な消火・救助活動を行っている。